

お久し振りね♥カトマンズ

2カ月の長い休暇を終えて、8月27日にカトマンズに戻って来た。気候は日本よりやや涼しく、湿度も若干低いと感じた。6月30日に当地を出発した時は、カトマンズが集中豪雨に襲われていて少々寒かったせいもあるが、東京の蒸し暑さは異常だと思った。ネパールでも気温が30度を超えることは多いけれど、同じ気温でもネパールよりは日本の方が暑く感じるのは湿度のせいだと思う。ましてや、この2カ月間はずっと樹生のお世話で空調の効いた部屋にすることが多く、ちょっと外出しようものならとたんに汗が吹き出したものである。

【雨季の爪痕】

間もなく雨季は明けると、道路舗装の痛みようはこの2カ月の降雨量を物語る。普段ジョギングで走るキルティプールからチョパール渓谷を越える山岳道路は、法面のあちこちに中小の崩落が見られた。水田の稲は大きく成長し、カトマンズ盆地全体が緑の絨毯で敷き詰められている。

【Home, Sweet Home】

KC夫妻もクリシュナも忠犬コテツも元気である。小屋で飼っていたニワトリのうち、雌1羽が死んだが、残りの雌1羽が卵からヒヨコを育て、現在7羽のヒヨコが親鳥の後を元気で追いかけている。ニワトリの世界も世代交代かな？6月は桃の最盛期で、私は我が家の庭に実った桃を日本に持って帰った（成田空港の植物検疫で半分近くを没収されたけれど）が、今では桃は全て終わり、オンマ（グアバ）やバガティ（ザボン？）が次第に実を大きくしつつある。ケラ（バナナ）も青い房が姿を見せた。11月に美澄と樹生がカトマンズに来る迄には食べ頃を迎えることだろう。

【風が飛ぶ季節到来】

層の上では既に秋、これからネパールでは10月のダサイン、ティハールに向け、いろいろな行事が催される。子供達はこの季節を待っていましたとばかりに凧上げで遊び始める。日本の凧と構造は似ているが、菱形で足はついていないし、日本の凧より若干小さい。朝、ジョギングをしていて電線に絡まる凧の残骸を見つけた。

【ネパール人への寛容性の回復】

やはり2カ月のリフレッシュが効いたのか、ここ数カ月「なんでネパール人はこうなんだ！」と言葉を荒げていた自分が、ネパール人に対して優しい気持ちを抱いていることに気が付いた。狭い道路に両方向から大型バスが突っ込み、1cm単位でハンドル操作ですれ違ふのは相変わらずの光景だが、以前なら車が立ち往生して待ち時間にいらついていた筈の私が、そのきめ細かな操作に感心していた。日本なら当然どちらかが譲ってバックするところだろうが、こうして問題をなんとか切り抜けて行く姿は、やはり我々と異なる文化社会的背景を垣間みるようで楽しい思いがする。

「亡霊」との遭遇

もののけ大国ネパール

職場復帰早々、8月29日付カトマンズポスト紙に次のような記事が掲載されていた。笑える話なので紹介しよう。

ネパール極西部のドティ郡バラチャイン村チャネバスティ住区在住のドゥルゲ・マニさん（23歳）は、カバディ川に程近い水車小屋に小麦をひくために出かけ、小屋で夜を明かすことにした。深夜、彼が眠っていると、彼に向けて何者かが投石を繰り返しているのが目覚めた。「誰だ！」ドゥルゲさんは目を開いて石が飛んでくる方向を見た。するとそこには世にも恐ろしい亡霊の群れ、ある者は頭がなく、ある者は牙をむき出し、またある者は床まで届く長い髪をしていたという。恐ろしくなったドゥルゲさんは、燃えかけていた薪を亡霊に向かって投げつけた。しかし、逆に後ろから襲われ、体ごと持ち上げられて近くの池に投げ込まれてしまった。その瞬間、白衣をまとった男の人（この地方では神様と信じられている）が彼に向かって両手を広げているのが見えた。ドゥルゲさんは必死で手を伸ばし、この白衣の男の人の手で池から救出されたのだという。

ドゥルゲさんはその後、午前3時頃ようやく意識を取り戻し、村に逃げ帰るべく暗闇の中をいちもくさんに駆け抜けた。亡霊達は彼を追いかけた。「この土地は我々のものだ。ここから出て行け！」と叫びながら。騒ぎに気付いたドゥルゲさんの家族が外に飛び出すと、そこには身の毛もよだつ亡霊の群れが、やがて村全体が恐怖のどん底にたたき落とされた。

この土地の人がジャンクリ（祈祷師）に問い合わせたところ、11世帯が住むこの辺り一帯は、過去32年間にわたりこの土地のマサニ・デバタ（神様のこと？）のものだったにも関わらず、住民はこれを耕作地として勝手に使ってしまったとか。以前はこれを鎮めるために生け贄の山羊を供えていたが、その風習も途絶えてしまい、だからこんな事件が起きた。ここは神聖な土地だから住民は放棄した方がよい。ジャンクリはそう忠告した。いくつかの家族は既に村を後にし、残った家族も別の居住地の提供を求めて村の行政機関と交渉中。事件の報告を受けたドティ郡長は、村に警察官を派遣して調査中とか。

ネパールには、この手の話が沢山ある。カトマンズのヒンドゥー教の聖地バシュパティナートでは時々心靈写真が撮られているし、以前紹介したように、人を呪い苦しめるなんてことが今でも行われている。荒俣宏氏が泣いて喜びそうなオカルトネタである。日本人でも、感受性の強い人は何かを感じることもあるらしいが、私は幸いにもそうした経験をしたことがない。

しかし、カトマンズポストのような大衆紙がよくもまあこんなネタを取り上げるものだと感心する。ゴシップネタが大好きなのはネパール人も同じなようだ。この手の話題は人から人へとどンドン言い伝えられ、派手な脚色がどンドン施される。

2カ月間の一時帰国、時々JICA本部に打合せに出かけた以外は基本的にフリー、いろいろやりたいと思っていたことはあったが、全部やるのは難しかった。でも概ね満足のいく休暇だった。妻子の顔も見れたし、日本の美味しい料理もたらふく食べたし、雑誌・本・ファミコンソフトもどっさり買い込み、テレビ番組も大量に録画し、これで単身赴任の暇つぶしはばっちりである。事務所のスタッフへのお土産は「パンにかけるふりかけ」！なかなかのアイデアだと自画自賛である。

この夏の日本での出来事をいくつか紹介しよう。

【拝啓、みきおはととても元気です】

6月18日、2,866gで誕生した山田樹生君は、8月18日の満2カ月の時点で5,600gを突破。2カ月で体重も2倍増。一足遅れで我が子と対面した私であったが、その後おむつの交換や入浴を手伝う中で、樹生が日一日と成長してゆくのがひしひしと実感できた。振る舞いも徐々に子供らしくなってきた、時々スマイルも見せてくれるし、泣くときは悲鳴を発するようになってきた。そうした子供の発育をずっと見ていられたのはとても幸せだった。JICA本部や市役所等での手続きがいろいろあったが、これも嬉しい苦勞だった。11月5日のカトマンズ到着に向けて、予防接種も開始。保健所では生後3カ月にならないと接種してくれないBCGは、任意ならすぐにはできることを知り、国分寺の山本小児科で接種を済ませた。

【高くついた初体験】

7月17日、美澄を経堂の美容院に車で送り、そのまま路上駐車して近くの喫茶店でくつろいでいたら、美澄が真っ青な顔で入ってきた。見事駐車違反で挙げられ、罰金15,000円を支払うはめに・・・

【かくして私はブタとなる・・・】

「日本に帰ってきて何が食べたいか？」とよく聞かれた。答えは時と場合により異なるが、今回はざっとこんなところだ。「ラーメン」「スパゲティ」「生クリームたっぷりのケーキ」「宅配ピザ」「回転寿司」「しゃぶしゃぶ」「たい焼き」「おだ巻（岐阜限定）」「モーニングセット（岐阜限定）」・・・私の食欲はほぼ満たされたが、その代償も大きかった。この2カ月間に5kg太った。ところで、2カ月もネパールを離れているとなぜか「ダルバート」が食べたくなるのが不思議。去年の一時帰国時の経験からも太ることは覚悟していたので、三鷹の実家の近所にあるスポーツジムの会員になって、暇を見つけてはトレーニングに通うことにした。だから、体重増の一部は上半身の筋肉だと思うし、むしろ、5kg程度でよく収まったという考え方もできる。自分自身原因は十分わかっているのだから、カトマンズに戻れば体重は落ちるだろうと楽観的である。但し、確かにズボンがきつくなっているのだから早急に減量せねばならない。

【過ぎたるは及ばざるが如し・・・】

本や雑誌を買い過ぎて、帰りのスーツケースはなんと40.5kg！さらに機内持ち込みのバッグにも本を詰め込んだ。雑誌は事務所へのお土産になるし、ローカルスタッフに援助手法を理解してもらうための英文資料をJICA図書館からコピーして大量に持ってきた。ただ、反省すべきは、休暇中に読もうとわざわざカトマンズから持って帰った本が、結局読めずに持ち帰ることになった点である。これだけで15kg程度はあり、どうせ読まないのに携行すると安心するという自分の意志の弱さを改めて痛感させられて。

【この夏もしっかり走りました！！】

今回は子育てがメインだったので、マラソン大会参加は7月末の月例川崎マラソンと8月24日の大菩薩峠登山競走大会の2つだけだった。特に、この暑い季節に標高差1,200mの大菩薩峠登山競走（15.6km）を制限時間内で完走したことは、大きな自信に繋がった。目標がなければ練習を持続させるのは難しい。だから、今年はこの時期に休暇が取れるとわかった時点から、大菩薩峠登山競走を大きな目標として練習を続けてきた。結果が出せて大満足。

【NGOへのささやかなる協力】

「シャプラニール」というNGOが、事業資金調達のために「使用済テレフォンカード・書損はがき回収運動」を行っている。この一時帰国をいい機会に、私が所属するベガサス走友会でこれらへの協力依頼をしてみようと考えた。会員の皆さんの反響は大きく、8月3日の走友会全体行事「ベガサス祭」の席上、百数十枚のテレカとはがきが寄せられた。8月20日にシャプラニール事務局を訪問し、担当の方に手渡した。大口だから喜んでいただけた。「ベガサス走友会」の名前が、近々シャプラニールの会報に掲載されることになっている。将来的には、貯まってゆく一方で処分に困るマラソンの参加賞Tシャツをバザーで売って現金収入に換え、これを寄付することも考えてみたいと思っている。

なお、この時期日本テレビが毎年恒例の「24時間テレビ」を開催していたが、実はこのチャリティー募金の一部は、ネパール南部の眼科病院の活動支援に充てられている。ささやかではあるが、心ばかりの協力をさせていただいた。

編集を終えて・・・

★日本の皆様、一時帰国中はいろいろお世話になりました。また、愚息の誕生について皆様から並々ならぬお心遣いをいただきましたことを、この場を借りまして厚くお礼申し上げます。お陰様で、樹生はすくすくと育っております。単身赴任生活での発育過程が暫く見れないのは残念ですが、11月にネパールに来る日が楽しみでなりません。

★今回の滞在中、これまで定期的に「サンチャイ通信」を送付してきた相手の方々が、この独断専行の家族通信を大事にファイルされ、毎月楽しみにされていることを耳にして、身の引き締まる思いがしました。毎月毎月ネタを探して簡潔な文章にまとめることはなかなか難しく、知っている者にしかわからない意味不明の表現になったり、誤字脱字を残したまま印刷かけたり、読者の方々に多大なご迷惑をおかけしてきたのではないかと恐縮しております。校正の大切さを痛感しております。

★ネパールでの任期も多分あと1年程度だと思います。これからも、気持ちを新たに、旅行ガイドとは違ったネパールの国と人を紹介すべく、楽しいニューズレターを作りたいと思いますので、ご愛顧宜しく願いたします。（浩司）